



読売歌壇



小池 光選

人間の力及ばぬ世のあるを『遠野物語』読んで思へり

【評】柳田國男の名著『遠野物語』。今の世になお生き、われわれの小さな苦悩を吹き飛ばす力がある。わたしは今年遠野を訪れる機会があった、その思いを深くしたところ。

部長より上手く歌って叱られた谷村新司の名曲「唄」

【評】カラオケにも作法というものがあつて、上司よりうまく歌ってはいけない。叱られるのは止むなし。それにしてもミュージシャンの計報相つぐ。谷村新司亡く、大橋純子も。まだ多少動けるうちは頑張つて行つてみようかダンスホールへ

【評】作者九十歳。その意欲を壮とす。ただ今の世の中でダンスホールというものがあるのか、どうか。昔はあつた。

「宿題の運針教えて」と男孫来て縫つて見せれば目を輝やかす
名古屋市 佐々木高子
村民もこつて参加山あひの生徒九人の大運動会
調布市 亀井 陽一

叱咤(さげす)のどくどくわが身の緊まりたり広目天に直むきあへば
東京都 唐木よし子
うつくしく引かれた眉が迫りきて歯科医の椅子にわれは口あく
仙台市 江川 森歩

ひとつでもうれしうことがあつた日を大事にしたい
秋風が吹く
鳴門市 楠井 花乃
バス停に桑山子(こ)とて立つ我の杖に巻き行く
松山市 三木須磨夫

晩秋の風
サヨナラだけが人生のよつと上下線の電車のドアが同時に閉まる
横浜市 森 秀人



栗木 京子選

ママ友も幼馴染みも集り来る終活個展花のにきわ

【評】絵画展だろうか。作者は終活の一つとして個展を開いた。かつての子育て時代の友人や幼馴染みも集まつてくれる。人生を振り返る良い機会になった。結句が明るい。

たわいなき身の上話に花咲かす一人旅だがひとりでもない
八王子市 松田 敦子

【評】旅の途中で東の間触れ合った見知らぬ人と言葉交わす。身の上話に少し脚色したりして、それも一人旅の楽しみである。「たわいなき」の自在な雰囲気心地よい。

夕ざれば壁に張りつく赤トンボ十月末の温みい
たたく
魚田市 豊岡 浩一

【評】飛んでいたり穂先にとまったりする赤トンボでなく、壁に張りつく様子を留めたのが新鮮。下句から季節感が伝わる。

ペダル踏み田道を行けば白鳥の四方より百羽降
田へ降りる
阿賀野市 小林 重雄

「道徳」で認知症学びし十二歳はあちやんなる
なと我に抱きつく
西条市 山本美知子
開園と同時に駆けて若者は無人のコキアの丘を
撮りたり
平塚市 原 道雄

人減りて里山荒れて熊増えて柿や栗の木捜し民
家へ
長野市 宮崎 雄
遠くから誰かに呼ばれたそんな気が路面電車が
カーブ切るとき
東京都 河野多香子
災害時忘れないうつ日に三度葉の名を言ひ脳下
レとして
足利市 葛山満智子
小さき足音の背を蹴り寝返りす孫のお泊り二歳
の寝息
茨城市 酒井美智子



俵 万智選

週末の予定をきみに訊いてからもう貸切の胸の一角

【評】約束をしたわけではないけれど、きみの予定に合わせて、心がスタンバイしているのだろう。そんな気分をこらえた「貸切」がユニークだ。

インクだけ先に乾いてしまつたら手紙の中に泣かないわたし
朝霞市 桐島 あお

【評】インクは乾いても涙は乾かない。手紙の中では泣いていなくても、現実では泣いている。結句で「泣かない」と言いながら、こんなにも泣いている歌なのだ。その切なさ。三十分からだに夕日を染み込ませ養老川の川土手あらく
市原市 井原 茂明

【評】しみじみとした散歩の歌。朝日なら浴びるイメージだが、夕日は染み込むのだ。「養老川」という固有名詞が効いている。

割れぬよう丁寧に置く四枚の皿をへ器」という
字の棚に
平塚市 小林真希子
カメムシを追い出すまでの一時間なんだかすこ
く返してほしい
東京都 大岩 真理

電飾が命の数に見えてくる駅前樹上戦火のニ
ューズ
柏市 塩田 淳文

甘口のカレーのような忠告でやさしくほくを説
き伏せるひと
上尾市 関根 裕治

星々を結ぶ線まで見えさうに君が教へてくれた
獅子座
青梅市 諸井 末男
あふれたりゆれたりあつくなりすぎぬ想いは自
然災害のごと
松原市 たろりずむ
退院を願ひ折る鶴仕上げには朝の空気で生命吹
き込む
豊中市 今西 幹子



黒瀬 珂瀾選

まだ鬼になりきれぬ夜ひたすらに演舞を習う佐渡の男は

【評】佐渡の鬼太鼓の練習風景か。その身に鬼を乗り移らせようと太鼓を叩き続ける男の勢いが迫真の演技に結びつくのでしよう。本番ではなく練習に注目した点が歌の眼目。少しぐらゐ寝ればよかつたウイスキー呑むたび弾いてた父の「月光」
越谷市 黒田 祐花

【評】ベートーヴェンのピアノソナタ「月光」。父が死んで、父の弾くへたぐそな月光を聴くことも無くなった。静かに月が照る夜にそんな父の姿を思い出しているのでしょうか。旅先の湯舟の中にそれぞれに印籠のごと術痕しめす
香取市 嶋田 武夫

【評】歳を取ると病氣自慢や手術自慢が増える。俺は腸を……私は心臓を……と傷を見せあう裸の付き合い。印籠という比喩が秀逸。さようなら櫻井敦司 天国でボードレールに唄つてあげて
調布市 菊川 直樹

母逝きぬ枕元には吾が歌の載りし紙面の畳まれ
てあり
鹿島市 白沢 友実

英雄か元凶か決めかねて『アラビアのロレンス』4Kで見
る
可児市 阿坂 れい

戦地よりの亡姑に届きし葉書見つ米粒のような文
字並びて
河内長野市 宮守 富

見はるかす外輪山の連なりて編年体で生きるさ
びしさ
茨城市 西村 重則

誰のため折る小さな石仏足元ふわり落葉がつ
む
鎌倉市 小山寿美江
トッファンとオリファン互いに健闘を讃えて降
りる阪神電車
吉野川市 喜島 成幸

◆投稿規定◆ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◆他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◆毎週月曜日に掲載 右の影絵はくまのこ